
随 想

日高先生と「根源的なものへの意志」

秋 田 稔

人はそれぞれ自分自身の歩みをもっている。私共が知る限りでの日高先生の歩まれたみちをふりかえってみると、如何にも日高先生らしい独自の歩みをされた方だと思つづく。しかし、先生の歩みは、自らのおかれた歴史的状況と色々なかたちで、あるいは積極的肯定的に、あるいは消極的否定的に、深い関わりをもち、歳を経るにしたがって、実は歴史と共に歩んできたのだということがいよいよ明らかとなるような、そのような歩みであったように私は思う。

歴史は、あるいは激しい、あるいは悠々たる大河の流れによくたとえられ、たしかに連続した出来事の系列という面をもつが、その奥底にまで入ると、実は挫折と再起、断絶と飛躍の一刻一刻であるともいえる。日本にとって、そしてそれは戦勝国にとってさえも、あの第二次世界大戦は大きな挫折のときであった。わが日高先生は、敗戦後の虚脱と激動の時代に、一高教頭より文部省の要職に転じられ、属国の屈辱と悲哀をつぶさに嘗めつつ、新生をめざす日本の教育革命の渦中で悪戦苦闘されたのであるが、その折一貫してとられた先生の基本的な態度は、歴史的な挫折をまさに挫折として男らしく真正面からうけとめるということであった。丁度その頃より私は先生ご一家と親しくお交りをいただく機会にめぐまれたのであるが、疲弊の極にある日本の現実の処理に日夜忙殺される立場にありつつ、先生は、古い生の基盤の崩壊し去った真因を深く省み、大胆に捨てるべきものを捨てると共に、日本の、そして人間の再生と飛躍のための正しい基盤を、外からの強制としてではなく内なる闘いにおいて自分たちのものとして、何としてでも見出してゆかなければならないという決意をもたれ、心中ひ

そかにその期を待っておられたようである。このような、根源にたちかえり、まことの生の基盤の上に断乎として生きようとする勇気をもつという先生の生の方向と、先生が文部次官をやめられて後、ある意味では最も安易ではない道を選ばれて、ICUに身を投ぜられ、教育の大学院を建設する責任を負われたということとは、深い関係があるように思われる。ICUに来られる折の、先生の先輩、友人の卒直な意見に耳を傾けられての熟慮、今は亡き奥様をはじめとするご家庭の蔭からの配慮と支援、その中で最後にはひとり、主のみ前に決断された先生を知るものとして、私共は人間が決断するときの重大さときびしさをつくづく感じさせられたものである。

先生は、周到なる配慮をもって、1953年3月、先ず大学院の研究、教育、奉仕という三つの機能のうちの研究と専門分野での奉仕を目指して教育研究所 (The Institute of Educational Research and Service, 略して IERS) を、湯浅学長、Troyer 副学長などの熱烈な支援の下に設立されたのである。小島先生、西本先生をはじめとして段々とスタッフもそろえられて行ったが、かくいう私も先生のご決意とお考えに心からの敬意と同感をもって最初に輩下に馳せ参じた一人である。研究所発足当時の私共の心にあった中心的なことは、私共はこれから先どういう人間として生きてゆくべきであろうか、そのための教育はどうあるべきかということであった。このことをめぐって、日高先生を囲み激論をたたかわし夜の更けるのを知らなかったことが、幾度あったことであろう。それは、既存の何かがあってその中で期待される人間像を考え合うというのではなく、がらがらとすべてが崩れ去った中で、裸の人間同士がどっかと対坐し、先入主なしに自らを見究め、あるべき人間の姿をあがきあいながら見出してゆこうという、そういった姿勢の集いであった。キリスト教文化を背景とした世界的視野をもつ人間をめざすという点では、お互に共通した意識をもったが、キリスト教といっても、キリスト教界は今度の戦争には何の責任もないといったような、いわば無反省なキリスト教の真理性の受容といった態度ではなく、キリスト教界自身も挫折と断絶の只中にあるという意識、だから

こそ裸一貫で、まことの謙遜をもって神の前に、そして現実の混沌たる事態の只中に立つという捨身の態勢こそ、私共にとって共通のものであった。私共にとって、福音信仰に生きること自体が、あらゆる先入主を打破して卒直大胆に現実をうけとめる、そういった勇気をもつことの根源でもあったのである。

日高先生の研究所の研究課題そして大学院の構想の第一にあったものは、新しい人間形成を基礎づける教育哲学の樹立ということであった。これは戦後の新教育の原理を研究することにちがいないが、この際、教育哲学の哲学という面に非常な強調点がおかれていたと私は思う。厳密な自己批判、自己弾劾を通過して、根源にかえり、人間の根源を問い、最も根源的なものから出発しようとする哲学的精神、これが過去の日本の教育原理に欠けていた第一のことであったという反省がここにある。このことと関連して、人間形成のキリスト教的基礎を、欧米よりの借りものの神学に基く中途半端な形においてではなく、我々自身の全存在をかけてする聖書そのもの、そしてキリスト教それ自体の最も基礎的な研究を土台としてつきとめきづこうという遠大な研究課題もうちだされた。これらはある意味ではいわゆる教育哲学の範囲を逸脱するものであるとのそしりをうけるものであったが、そこまで下っての基礎がためを欠いていたからこそ、真に世界史的なパースペクティブをもった人間形成の理論を私共は過去においてうちたてることが出来なかったのである。

更には、教育についての真に学的といわれるに値する研究の基礎がためをするための思想史的、心理学的そして社会学的基礎研究の重視が、第二の構想、強調点として第一のそれにともなっていた。それらとの真の協力によってこそ哲学的精神も教育原理研究の中で生かされてくる。

第三の構想以下は、国際理解のための教育の研究、視聴覚教育の研究、学生補導の問題の研究等、どれをとってみても当時としては最も新しい、しかも緊急の研究課題に取り組む姿勢を示したものであった。

これらを通して見て、私共の出発点は、何年かたてば色あせるようない

わゆる新教育の理念づくりでは決してなかったことはたしかである。並大抵のことではキリスト教文化を背景とする人間教育も、国際的視野に立つ教養教育も成り立たないこと、ICUの存立の意義、教育の大学院の存在理由も、本当にICU人の骨身をけずるような相互の切磋琢磨と外からの挑戦をうけとめての真剣な対話を通して、はじめて明らかになりはじめること、しかもそれは第一歩にすぎないこと、そういった気持だったのである。その後、大学院も発足し、一応スタッフもふえ、部門によってはたしかに学界の先端をゆくものもでてきた。だが、全体としての大学院教育学研究科の独自性、過去への反省をこめて提起された問題への意識はどうなったであろうか。今日、ICU全体の教育方針の再検討が云々されているが、現状をみると、真のICU教育の基盤たるべきものを全員心を一つにして追求し、確認し合い、問題の困難さを本気になってふまえた上で、遅々としてではあるが一步一步確実に進むというよりも、内外からの要請とか諸要求に答えようとして、根源をかえりみるいとまもなく、負い得る責任範囲を越えてどんどん進んできてしまったという印象が強い。

今こそ、目高先生を中心に歩みをはじめたときの「根源的なものへ立帰る意志」を思いおこすべきときではないかと私は思う。先生は停年でICUを去られた。先生のICUでの十数年のご労苦とご功績に対し、私共はいくら感謝しても尽し得ない。しかし、それよりも、日高先生の研究所発足以後のご業績さえも自己批判の対象とするような「あらゆる先入主を打破した根源的なものへの意志」への復帰こそ、今の私共に求められるべきことであり、また日高先生への報恩の第一歩であろうと、私は考えている。

(国際基督教大学教授)